

令和 4 年 5 月 9 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02554

研究課題名(和文) S-HTP法によるカンボジアの幼児・児童の描画活動に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study on Children's Drawing Activity by S-HTP Method in Cambodia

研究代表者

鈴木 光男 (Suzuki, Mitsuo)

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：00548092

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：2018年度より3年計画で、カンボジア・日本両国小学生を対象としたS-HTP法(Synthetic-HTP：統合型HTP「1枚の用紙に、家、木、人の3つ全て」を描いてもらう検査)による描画調査を実施した。当初は3回の描画調査を予定していたが、COVID-19により2回のみ調査となってしまった。しかし、2回の調査をとおして、日本の子供たちは想像力・創造力に長じた部分が確認でき、カンボジアの子供の絵にはリアルな生活経験をもとにした絵が描かれていることが分かった。そして、描画活動は子供の生を充実させるものであり、これからの社会、ポストコロナの世界で重要なものになることが示唆されるものとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カンボジアの新教育課程で週1時間芸術科目(音楽・美術)が導入されることになった。そのような時期に、日本のNPOの支援により描画経験がある児童とない児童、また日本の児童の描画活動傾向を比較することで、これからのカンボジアの美術教育に必要と思われることが具体的に変わったと共に、日本の美術教育、あるいはそれに限らない学校教育全般にわたる課題が明らかとなった点に意義がある。

カンボジアの子供の絵は表現力の未熟さはあっても生活経験に基づく内容の豊かさがあつた。日本の子供の絵は空想に富んでいた。このようなことから、今後の日本の美術教育ではSDGsなどリアルな社会課題と結び付けた表現活動が一層重要である。

研究成果の概要(英文)：The Japan Team of Young Human Power (JHP), a nonprofit corporation, and Small Art School have been actively supporting Cambodia. They have been facilitating teacher training and curriculum development in art education. As a result, an art subject will be newly introduced in the new Cambodian education curriculum. The new Cambodian curriculum will include one hour of art class per week and will be implemented in elementary schools. Prior to art education beginning in Cambodia, we investigated if there was a difference in the students' development of creative expression in drawing depending on whether the students had experience with the picture development method called the S-HTP (Synthetic House-Tree-Person technique). We found that children with learning experiences had more expressive power. They used their imagination based on their real life experiences while expressing their creativity through drawing.

研究分野：美術教育

キーワード：美術教育 初等教育 国際支援 S-HTP 描画 国際比較 JHP(学校をつくる会) スモールアートスクール

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

カンボジア教育省は2016年1月に「全ての国民が潜在能力を存分に発揮できるようにする」「全てのカンボジア人が、身体と知識、国や人間を愛する心を調和した形で発達させ、国の発展、そしてカンボジアが地域及び世界に結び付けられることに貢献する」とする新教育課程フレームワーク「カリキュラム改革のヴィジョン」を公表した。そして、2018年に新教育課程の基準の開発、2020年からは「完全な市民(Full Citizen)」を基軸とした教育課程普及が目指されることとなった。ここで特筆すべきは、芸術科目(音楽・美術)が小学校で週1時間導入されることになったことである。

この芸術科目(音楽・美術)のシラバスや教科書などの作成は、JICA 草の根技術協力事業「初等科芸術教育支援事業」として特定非営利活動法人「学校をつくる会 Japan Team of Young Human Power(以下 JHP)」が担い、カンボジア教育省と協力して進められている。

JHP は、1993年に設立された当初から校舎建設・寄贈だけでなく芸術教育(音楽・美術)の普及に尽力しており、カンボジア国内でも特に貧しい地域であるカンポット・スヴァイリエン両州を中心に絵画展の開催やクレヨン・パスなどの画材提供を現在も継続している。

また、元東京都立高校美術教師 笠原知子氏がシェムリアップに2008年開校した Small Art School(以下、SAS)もシェムリアップ近郊の村の2校で描画学習の出張授業を継続して実施している。本調査研究では、JHPに加えてSASの支援校も対象とする。

2. 研究の目的

JHP や SAS の支援によりカンボジアの児童の描画がどのように変容しているか、支援がなされていない地域や日本の児童の絵とはどんな違いがあるかを調査した。描画学習の経験の有無による児童の絵を比較調査することで、想像力や表現技術など美術教育を通して育まれる資質・能力について検討・考察するだけでなく、カンボジアの美術教育支援や日本の図画工作科、とりわけ描画学習の今後に資することを目的としている。具体的には、カンポット・スヴァイリエン両州の JHP 支援校(以下、支援校)とその近隣の JHP 非支援校(以下、非支援校)の児童の描画を S-HTP 法により描画データを収集し、校種間で比較検討するだけでなく、校種ごとの1回目・2回目の調査結果を比較する。

3. 研究の方法

以下の期間・方法で対象となる小学校で描画データを収集した。当初は3回目の調査(2020年6月~2020年7月)も予定していたが、COVID-19により実施できなかった。

(1)期間

1回目の調査：2019年2月~3月

2回目の調査：2019年12月~2020年2月

(2)対象校(計8校)

・支援校(カンポット州・スヴァイリエン州各1校、計2校)

・非支援校(カンポット州・スヴァイリエン州・プノンペン市各1校、計3校)

・美術教育実践校(SAS 関係校2校・日本公立校 以下 JPN1校、計3校)

支援校には絵の具・クレヨン、画用紙などの提供が続けられており、JHP 主催の絵画コンクールへの参加も継続されている。また、SAS の関係2校も貧しい農村地帯にあり先の学校と生活環境の違いはないが、画材の提供だけではなく SAS による月3回の出張授業(1年間で約20回、各学年平均では年3回程程度)が提供されている点に違いがある。プノンペンの非支援校は都会の市街地に位置し、カンボジアの他の調査対象校とは生活環境に大きな違いがある。日本の公立校も、地方都市とは言え市街地にある学校である。

(3)調査目的

カンボジアでは、描画学習の経験を有する児童は非常に少ない。小学校が午前・午後の2部制で全体的な授業時数が少ないうえに、教える教員もいなければ画材不足も深刻である。そこで、JHP がクレヨンや絵の具の提供など美術教育支援を継続している支援校と非支援校を対象に、描画の学習経験の有無から児童の描画にどのような違いが見られるかを S-HTP 法により調査する。合わせて、SAS が出張授業を提供している関係校や日本の公立校の児童の描画とも比較し、描画の学習経験の有無によりどのような違いが見られるかを実証的に明らかにするものである。

(4)調査方法

S-HTP 法による描画調査。1~6年生各学年10人程度の児童に、30分間で横向き A4 用紙に家と木と人、その他思いついたものを自由に描いてもらい、結果を分析・整理する。先述の通り、本調査では心理面の分析はせずに S-HTP 分析項目・観点(表1)に従ってどのような表現がなされているかを整理し分析する。加えて、家や人については東山明(2016)『子どもの絵の発達と道筋 - 子どもの絵の作品と説明』(日本文教出版)の描画の発達段階に照らして分析し、1回目・2回目調査の差異や校種ごとの特徴を整理する。

以下は、具体的な調査マニュアルである。これをもとに、どの学校においても同様の流れで進

むようにした。

S-HTP 法 調査実施マニュアル

【検査のための説明】

1. 名前などの自己紹介。
2. 今日は皆さんに絵を描いてもらうために来ました。
3. でも、それは絵のうまい下手を見るためのものではありません。
4. どんな生活を送り、どんなことを考え、どんな絵を描くのかを見させてもらうものです。
5. それによって、よりよいカンボジアの学校や絵の学習を考えるための参考にします。
6. ですから、「うまく描かなくて」「ちゃんとした絵にしなくて」などと考えずに、思いのままに好きなように描いてください。

【実施時の指示】

1. 紙(A4 コピー用紙)は横に使ってください。
2. 忘れないうちに裏に名前と、学年と、女の子か男の子かを書いてください。
3. (表に戻して)家と人と木を入れて、あとは何でも好きな絵を描いてください。
4. 家と木と人が入っていれば、どんな絵を描いてくれてもいいです。
5. 先ほど言ったように、絵のうまい下手を見るものではありませんが、いい加減でなく、できるだけ思いを込めて楽しんで描いてください。
6. 時間は 30 分間です。他の人のことは気にせずゆっくり描いてくださいね。30 分経たなくても提出したい人は提出してください。

(5)分析方法

1 枚ずつ図工担当教員 2 名と統合性、描画サイズ、付加物、遠近感、現実的・非現実的描写といった 5 つの分析項目・17 の分析観点(表 1)で分析し、家や人の表現は東山明(2016)の示した発達段階に照らして評価した。分析者 3 名が異なる評価となった場合は、改めて検討し評価を定めた。そして、支援校・非支援校・SAS・JPN という校種ごとの出現率を求め、カイ二乗検定結果をもとに比較・検討する。さらに、三沢直子(2014)による「S-HTP 評定用紙」2)から「社会性」を除いた 4 観点による評定用紙(資料 1)を用いて、1 枚ずつ描画の質的な側面も評価し、各校種ごとの平均値を求め比較・検討する。なお、ここでの「エネルギー水準」とは、「元気のよさや力強さ、積極的な描画活動の度合い」など描画から印象として受けるものであり、標準的なものを「0」とし、上回るものを「+1・+2」、下回るものを「-1・-2」としたものである。

資料 1. S-HTP 評定用紙

表 1. S-HTP 分析項目と観点

分析項目	下位項目	分析の観点
統合性	1 明らかに統合的	全体的に一つのまとまった場面構成がなされ、不調和な部分がない。
	2 やや統合的	全体的に一つのまとまった場面構成がなされているが、一部に不調和な描写が残る。
	3 媒介による統合	家と木と人自体は羅列的だが、地面・山・草などの媒介によって一応の統合は図られている。
	4 やや羅列的	一部にやや関連づけは見られるが、全体的には羅列的に描かれている。
	5 羅列的	家と木と人が無関係に羅列されている。
描画サイズ	6 全体で4分の1以下	描かれた絵全体が、画用紙の4分の1以下の小さな絵(ただし、この物が離れて描かれている場合は、一箇所に集めた大きさで判断する)。
	7 HTPで4分の1以下	付加物は別にして、家と木と人の総和が4分の1以下の絵。
課題以外の付加物	8 付加物あり	家・木・人以外の付加物を書いている(地面は除く)。
遠近感	9 大	遠くまで細かく描き、遠近感が大きな絵。
	10 中	家木人の付近にのみ遠近感がある。
	11 ややあり	明確な遠近の示唆はないが、家木人が上下に描かれ、やや遠近感がある。
	12 直線(重なりあり)	家と木と人が直線上に並んでいて遠近感はないが、家と木、家と人など、いずれかが重なっている。
	13 直線(重なりなし)	家と木と人が直線上に並び、前後の重なりもない。
	14 ばらばら	家と木と人がばらばらに描かれ、遠近感がない。
現実的・非現実的描写	15 現実的	全体的に描写内容が身近で現実的な物。
	16 混合	現実的な内容と非現実的な内容が混在している物。
	17 非現実的	全体的に描写内容が非現実的な世界を描いている物。

「発達レベル」も描画全体から受ける作者の発達の印象を同様に評価し、「内的豊かさ」は描画全体に込められた「作者自身の思いや絵のイメージ・お話の豊かさ」を評価者が印象として受け止め点数化するものである。なお、本調査においても描かれた絵のみをデータとしている。それは、先のプレ調査(2018)において「描画後質問用紙」を配布し、「絵全体」「人について」「家について」「木について」それぞれの説明や感想を記述してもらおうと準備していたが、カンボジアでは3年生でも文字が十分に書けない児童が多く、十分なデータは得られなかったからである。

4. 研究成果

2回目の調査結果を中心に、研究成果を述べる。

(1) 支援校と非支援校の比較

支援校は非支援校より統合的で遠近感があり、人の表現において前図式的な表現上の発達段階にある児童が多いという傾向が見られた。対して、非支援校は羅列的で直線上に家や木・人を配する傾向にあった。これらは概ね1回目の調査と同じような傾向であったが、全体的にその差は縮まっており、有意差が認められた観点数も1回目の11観点から今回は6観点へと減少した。つまり、1回目から2回目までの10か月ほどの間で、非支援校の描画は積極性や想像力、また家や人の表現力など多くの点で向上・変容したと言える。

(2) 支援校と日本公立校の比較

支援校とJPNについても、概ね前回調査と同じような傾向を示した。特に、「現実的・非現実的描写」については、JPNが空想に富む非現実的な表現が多いのに対し支援校はリアルな生活場面を描写したものが多く、この点については変わりがなかった。三沢(2014)もタイの児童の絵と比較した日本の児童の「非現実的描写」の多さを指摘している。また、前回「課題以外の付加物」でJPNは100%の出現率であったのが、今回は支援校とそれほどの差が見られなかった。これは、これまでのカンボジアの調査でも見られたことだが、一部の児童が課題である家・木・人を描き終えたところで描画を終了し退出すると、それに続くようにして終了・提出する児童が見られる。今回、JPNにおいて途中退出する児童が多くなったことが「付加物」を描く児童減少に関係しているかも知れない。しかし、それは推測の域を出ず断定することはできない。その他、支援校は家や木・人などがいくぶん小さく人の表現が稚拙で棒人間が多いといった点や、遠近感では日本の公立校の方がやや乏しいという点は前回と同様であった。

(3) SAS と非支援校の比較

前回の調査と同様にSASの描画調査は3年生以上の児童のみであったため、非支援校、JPN共に3年生以上のデータで比較・整理した。SASと非支援校を比較すると、前回同様に「統合性」「描画サイズ」「付加物」「遠近感」において違いが見られた。SASは家・木・人が大きく、想像力があり積極的に描画に取り組み、家・木・人の周辺で遠近感ある表現がなされていた。非支援校は、それに反して描かれたものがやや羅列的であり、前回同様に棒人間が多く描かれていた。

(4) SAS と日本公立校の比較

「統合性」において「媒介による統合」に有意差は見られるが、その他の観点を合わせて総合的に見るとSASとJPNに統合性の差はそれほど認められない。「描画サイズ」や「付加物」を見ると、SASの方が大きく積極的に描いていると言える。「遠近感」ではSASは遠近感がありJPNはやや乏しく、「現実的・非現実的表現」ではJPNが空想に富みSASはリアルという点においては、前回同様の傾向が見られた。また、人の表現では、JPNの前写実的な表現が多くなっていった点が前回とは少し違った傾向であった。前回調査から10か月間で、JPNの3年生以上は図式的な表現から前写実的な表現へと移行する段階にあると推察される。

(5) 校種ごとの1回目・2回目調査の児童の絵の観点別出現率の比較

1回目の調査で全ての項目において他の調査対象校より下回っていた非支援校が、最も多くの点で変容が見られた。これは、まだ十分とは言えないが、新教育課程において芸術科目(音楽・美術)が週1時間新設されることが発表され、シラバスや教科書は出来上がっていない中でも非支援校で月に1回程度は描画の学習がなされるようになったことの影響が大きいと思われる。描画の学習経験がこれまで乏しかった分、新たに導入された月1回程度の描画の学習の影響が大きく、積極性や表現力全般で他の調査対象校より向上・変容が見られたのであろう。調査前、非支援校は他の調査校との差を縮めることなく変容もあまり見られないと予想していただけに非常に驚かされた。

校種ごとの1回目と2回目を比較すると、主には次のような変容があった。

【支援校】遠近感や現実的・非現実的描写、人の表現に関して変容が見られた。

【非支援校】描画サイズや遠近感、現実的・非現実的描写、そして家の表現など多くの点で変容していた。

【SAS】変容した点は少ないが、サイズや遠近感、人の前写実的表現に関して変容が見られた。

【JPN】SAS同様に変容した点は少ない。統合性や家と人の描写に関してのみ変容が見られた。なお、1回目の調査で100%であった「付加物」が2回目まで89.3%まで減少しているが、先述の通り時間途中で退出する児童が多かったことが原因しているかも知れないが断定はできない。

(6) 1~6年生児童の絵の質的評価比較(支援校と非支援校・日本の公立校)(図1)

支援校は「発達レベル」のみマイナスとなっており、非支援校は全てにおいてマイナスとなった。JPNは全てにプラスとなっている。

1回目調査と比較して最も変容が見られた非支援校であったが、質的に評価・比較すると他の

対象校に比して描画に対する発達はまだ十分ではないことが明らかとなった。しかし、支援校と非支援校間に絵画表現の「発達レベル」の差は認められず、「エネルギー水準」や「内的な豊かさ」において差が認められた。これらは描画に向かう積極性や想像力に関わるものである。総じて蓄積された描画経験の量的な差に由来するものであろう。支援校には JHP から画材の提供がなされており、月 1 回程度の描画学習が非支援校でもなされ始めたとは言え、非支援校よりも支援校の描画学習が充実しているのは明らかである。画用紙やクレヨン・パスなどが全くない非支援校も珍しくない状況なのである。

(7)3 年生以上児童の絵の質的評価比較(支援校と SAS・日本の公立校)(図 2)

支援校のみ「発達レベル」でマイナスとなっており、SAS と JPN は全てにおいてプラスとなっている。SAS の描画指導は各学年それぞれ年 3 回程度だが効果を挙げている。SAS と JPN は「内的豊かさ」と「総合的な評価」では殆ど差がない。家や人などの表現上の「発達レベル」は日本の児童の方が上回っているが、「エネルギー水準」は SAS の方がやや高い。SAS は巧みではないが、積極的に楽しんで描いている様子がかがえる。先述した日本の調査対象校校長が抱いた印象・言葉が今回の質的評価により裏付けられた形である。

木村・佐藤(2019)はカンボジアと日本の中学生の樹木画の比較を通して、「CAM(カンボジア)において認められた(略:筆者)表現の豊かさは、彼らの生の躍動性、あるいは子どもの生にとって重要となる学びへの意欲とも関連している」4)と述べている。このことは、先の校長の言葉のように、稚拙ではあるが「健康的」で「素直」な表現と通ずるものである。本調査の主たる目的と直接関わるものではないが、今一度日本の教育や子供を取り巻く生活・環境について見直したい。前回調査後にも触れた点ではあるが、「三沢(2014)の指摘とも重ねて、日本の児童の絵の表現力に見られる停滞を危惧するところである。彼らの表現が立ち現れる前後の経験や環境を豊かにし、身体的なリアルな実感を伴う活動・経験をより一層充実させていくことが重要」5)ということをも改めてここに記しておきたい。三沢(2014)が「発達の停滞」と指摘した中では、特に「しっかりとした現実感が育っていない」6)、「自分に対する実感や自己肯定感、他者に対する共感性などが育っていない」7)の 2 点に注目したい。今後の美術教育の展開を考えたとき重要な点と言えるのではないだろうか。

今後の日本は工業社会から情報社会、そして創造社会へと移行し Society5.0 と言われる時代への移行期にある。非現実的な空想を楽しみながら自由に想像を巡らせ、自分ならではのストーリーを展開・創造する日本の子供たちの絵にはこれまでの日本の美術教育による成果が認められる。美術教育が担う身体性と想像性を分け隔てなく重視していく創造的な学習展開が、今後一層求められよう。

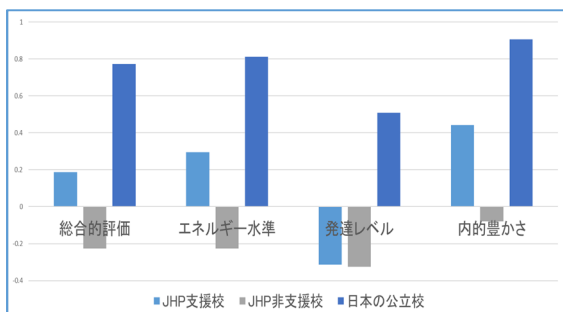


図 1. 1 ~ 6 年生児童の絵の質的評価比較 (支援校と非支援校・日本の公立校)

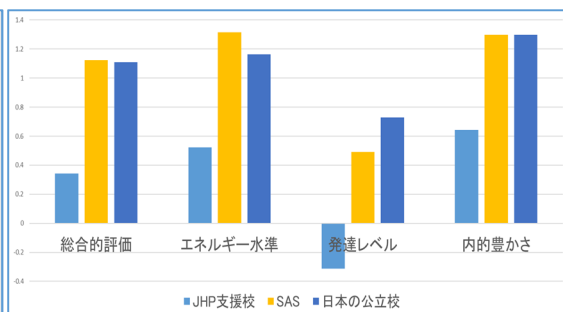


図 2. 3 年生以上児童の絵の質的評価比較 (支援校と SAS・日本の小学校)

(8)調査結果のまとめ

調査対象校種ごとの表れは以下のようにまとめられる。

2 回の調査を通して、非支援校が多くの特長で変容していた。新教育課程に基づく絵画学習が導入され始め、非対象校でも月 1 時間程度の学習がなされるようになったためと推察される。

支援校には画材の提供がなされており、非支援校よりも描画学習が充実していると思われる。

支援校と非支援校間の「発達レベル」の差は認められない。しかし、「エネルギー水準」や「内的な豊かさ」において著しい差が認められる。結果、「総合的な評価」においても差がある。

全ての面で SAS が支援校より質的に上回っている。画材の提供だけでなく、週 1 回程度の出張授業を提供し、美術教育の専門家が支援・指導していることが影響していると思われる。

SAS と JPN は「内的豊かさ」と「総合的な評価」では殆ど差がない。表現上の「発達レベル」は JPN が上回っているが、「エネルギー水準」は SAS の方が高い。SAS の児童は巧みではないが、積極的に楽しんで描いている。想像力の面でどちらが優位かは断定できないが、日本の子供たちの方が空想・非現実的なストーリーを絵の中に展開している。

JPN・SAS - 支援校 - 非支援校の順で、絵の「統合性」(画面全体の構図のまとまり)が認められる。描画学習の経験が豊富になるにつれ、「統合性」は高くなっている。

JPN は現実的な内容ばかりではなく、非現実的・空想的な内容の絵を描いている。また、質的に優れている。ただし、「遠近感」に関してはカンボジアの子供たちが上回っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木光男	4. 巻 305
2. 論文標題 S-HTP法によるカンボジアの幼児・児童の描画活動に関する実証的研究()	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術教育	6. 最初と最後の頁 06-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木光男	4. 巻 139号
2. 論文標題 S-HTP法によるカンボジアの幼児・児童の描画活動に関する実証的研究()	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木光男
2. 発表標題 S-HTP法によるカンボジアの幼児・児童の描画活動に関する実証的研究()
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木光男
2. 発表標題 S-HTP法によるカンボジアの幼児・児童の描画活動に関する実証的研究()
3. 学会等名 日本美術教育学会東京大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木光男
2. 発表標題 S-HTP法によるカンボジアの幼児・児童の描画活動に関する実証的研究（初年次）
3. 学会等名 日本美術教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------